

子どもたちの「ふくしまへの想い」の  
実現を応援します!

チャレンジ!子どもがふみだす 体験活動応援事業

# 「ふくしまの未来」へつなぐ 体験応援事業

〈令和4年度〉  
実践  
事例集



海外の高校生とオンラインで国際交流。  
復興への思いを伝えました。



現地の方との交流を通じて、  
福島の状態を伝えることができました。



ドイツの学生と交流を通じて、「震災からの復興」  
「ふくしまの今」を国内外に発信することができました。



被災地を訪問し、自分の目で現地の様子を見て、震災の爪痕と復興の様子について学び、理解を深めることができました。

福島県教育委員会



# ☆ 復興に貢献したい！ 一歩ふみだす子どもたちを応援します！ ☆

## 事業概要

東日本大震災及び原子力発電所事故から12年が過ぎ、本県は、今後も復興・創生に向け、様々な課題を乗り越えていかなければなりません。令和3年12月に策定した、第7次福島県総合教育計画では、本県の教育の柱に「学びの変革」を掲げ、6つの施策を展開しており、その1つ「福島で学び、福島に誇りを持つことができる『福島を生きる』教育を推進する」を受け、この事業では、復興を教材とした福島ならではの社会体験活動・社会貢献活動を推進し、復興に貢献しようという想いを高めています。また、その想いを具現化し、主体的に復興の発信や教訓の継承等に寄与する社会体験活動を県内外で広く行うことで、子どもたちの「志」を育み、復興・地域創生の担い手を育成する事業です。

**採択条件**

子どもたちが主体となって自ら考え、判断し、行動を起こす社会体験活動・社会貢献活動や地域の復興を支援する取組等で、以下のいずれかの視点に係る事業とします。

- (1) 被災者や避難者、復興関係者、支援者等との交流活動等の取組
- (2) 地域の復興を考え、県内や他県、海外等へ復興をアピールする取組
- (3) 地域の将来を見据え、地域活性化を実現する取組

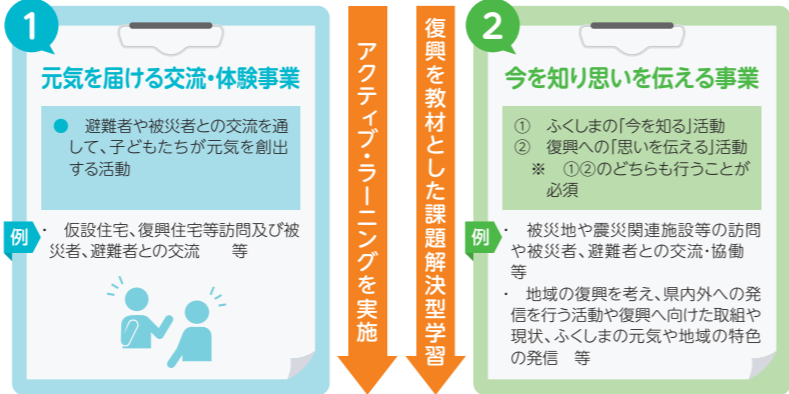
**補助事業者**

福島県内に主たる活動拠点があり、県内に事務所を有し、地域において青少年育成活動に取り組んでいる実績を有している団体（市町村、国公立学校、PTA、NPO 等）

（補助額）

事業1	上限 50万円	事業2	上限 200万円	※補助金額は、補助対象経費の8/10以内。
-----	---------	-----	----------	-----------------------

※上記とは別に海外渡航費として海外渡航に関わる経費の8/10以内、100万円を上限で認めます。



地域への誇り 自立心 創造性 社会性  
困難を乗り越える力 実行力 郷土愛

自己肯定感の高まり

★ 新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成 ★  
★ 福島ならではの教育として全县で推進 ★

**事業実績** 令和4年度は のべ24団体からご応募いただきました。  
●（採択団体）21団体 ●（事業1）1団体 ●（事業2）20団体 となりました。

# 今を知り思いを伝える事業

**事業名** 震災の記憶と教訓を次の世代へ  
～震災を知り、福島の今を国内外に発信する～

**福島県立あさか開成高等学校**  
日本文化部・読み聞かせボランティア部  
オイガ

**概要** 東日本大震災から広島県に避難し活動する方や、それを支えてくださる方との交流を通して、広島での原爆・平和の継承に関する課題について学ぶ。さらに、阪神淡路大震災の記憶と教訓を次の世代に伝えるべく活動する人々と交流して、震災の記憶と教訓を風化させない方法を考える。また、SDGs未来都市である倉敷市の取り組みから、災害に強く持続可能なまちづくりを学び、地域の活性化について考える。そして、学んだことを生かして、県内外や海外の高校生に対して、原発事故のイメージにとらわれない福島県の現状を発信する。

**取組内容**

- ① 福島県の「今を知る」活動…コミュニティ福島・伝承館学習、富岡伝承祭・交流会への参加、小高花卉栽培店訪問、被災地より避難を余儀なくされた障がい者就労支援事業所（NPO法人しんせい）との協働。
- ② 復興への「思いを伝える」活動…広島平和学習、ひろしま避難者の会・支援団体との交流活動（アスチカ、広島市社会福祉協議会・南相馬ボラス応援隊（講話）、ひろしま紙芝居村（上演））、SDGs未来都市倉敷のまちづくり学習（ベティスミス）、神戸・震災復興学習（神戸港、東遊園地モニュメント、人と防災未来センター（講話））、「1.17希望の架け橋」との交流会、京都・光華高校との交流会、華道家元池坊に「ふくしまの花」贈呈。大阪・明星高校との交流会、海外の高校生とオンライン交流。



**この事業のポイント**

それぞれの土地での人々との交流を通して、様々な災害を学び、それを伝える人の思いを知り、伝え語り継ぐことの意義や重要性、そして、これからの「ふくしまのあるべき姿」について考えを深め、復興に貢献しようという想いを高め、国内外に発信する活動ができた。福島県民であることを誇りに思う気持ち、よりよい未来を創る県民としての使命感が醸成される。

# 実践事例 事業1 復興に貢献したい！ 一歩ふみだす子どもたちを応援します！

**事業名** つながろう大熊と、広げよう私たちの絆  
～大熊の「友」と「共に」～

**福島県立会津支援学校高等部**  
サービス班

**概要** 会津若松市には東日本大震災（以下、「震災」という）で被災し、大熊町から避難している住民が生活している。その住民の中でも、西本真理子氏は震災後の逆境の中でもたくましく立ち上がり、会津若松市で「食堂カフェハレの日」を運営している。本校は学校経営・運営ビジョンの一つに「地域との連携・協働」を掲げている。また、高等部サービス班は職業生活に必要な基礎的・基本的な力を高め、自立と社会参加できる力を養うことを目的として学習している。これらを踏まえ、会津若松市で共に生活する仲間として、大熊町の住民と交流し友情の絆を深めたい。また、経営者の西本氏や店長の寺島氏からサービスの基本姿勢やホスピタリティ精神とともに、ふるさと大熊町への思い、震災後の復興にける情熱について学んでいきたい。さらに、大熊町と会津若松市の絆の象徴となる商品を共同開発し、住民に元気を届けられるようにしていきたい。

**取組内容**

- ① 震災や大熊町についての調べ学習
- ② 大熊町の方々の話を聞く会
- ③ 接客サービスについての講習会（1回目）
- ④ 「食堂カフェハレの日」の商品開発（デザイン作成）
- ⑤ 接客サービスについての講習会（2回目）
- ⑥ パワー祭り（学校祭）での「おおくまベリー」披露
- ⑦ 「食堂カフェハレの日」での「おおくまベリー」試飲会
- ⑧ 大熊町の方々と交流会



**この事業のポイント**

障がいのある生徒たちが、大熊町の方々から学んだことを生かして、自分たちができることを考えた。大熊町の新しい特産品である「おおくまベリー」を使用し、「食堂カフェハレの日」と共同開発して「おおくまベリー」を完成させた。完成した「おおくまベリー」を「食堂カフェハレの日」のお客様や、大熊町の方々に飲んでいただき、絆を深めることができた。自分たちの考えを実現できたことで、自信をもつことにも繋がった。

**事業名** 「ふくしまを知る・伝える・盛り上げる」

**福島県立ふたば未来学園高等学校**  
社会起業部

**概要** 震災から12年目の現在、双葉郡内に唯一となった高等教育機関のふたば未来学園高校は地域と連携し、原発事故によって発生した、あるいは加速した諸問題について部活動単位で取り組んでいる社会起業部の子どもたちが福島県の今を正確に分析し、確かな情報を広く伝える。さらに災害からの復興を目指す人々との交流会を実施し、現状を解決する知恵と勇気と実行力を醸成することを目的とする。

**取組内容**

活動を広く周知するためのリーフレットを作成する（伝える）。

6月 いわき市・双葉郡フィールドワークで地域の現状を広く周知し、復興を願う気持ちの伝達法を考え準備をする（知る・盛り上げる）。

7月～8月 神奈川県立緑ヶ丘高等学校との交流（伝える）。関西の高校生との交流（伝える）。その他本校来訪者と適宜交流。

8月 宮城研修 気仙沼、石巻方面にて、ふたば未来学園の生徒が福島県の震災からこれまでの状況を発表、ふくしま県産品の試食会や地域の方とグループ討論（伝える）。

12月 沖縄研修 沖縄が抱える問題は、福島のものと同様であり、生徒の学びとなり、かつ福島をアピールするフィールドとして適当だろう。戦跡や米軍基地などを学ぶフィールドワークと現地の方との交流を通じた福島県のPRを行う（伝える）。毎回Facebookで発信を行う。（伝える・盛り上げる）未来を切り開くための力を備える人材になることが目標。さらに福島県産食材のおいしさと安全性をPRする。



**この事業のポイント**

全国の人々（SNS活用）や、宮城県（石巻市、気仙沼市）、沖縄県の方々に、福島県で生活する高校生の現状を理解してもらい、立場にこだわらず対話することで、偏見や差別に負けず、自分の未来を確かなものとするために、思考し表現することで、未来を切り開くための力を備える人材になることができる。さらに福島県産食材のおいしさと安全性をPRできる。



## 事業名 2022国際高校生放射線防護ワークショップ

福島県立安積高等学校  
物理部

### 概要

本事業は、福島の高校生が東日本大震災や福島復興について学び、学んだことを発表するワークショップである。コロナ感染症の関係で、県外海外からの研修への参加はなかったが、福島高校、ふたば未来学園高校の県内3校で活動した。他方、5月には大学生との交流、9月には来日した米国環境保護局長官との面会の機会をいただいたほか、1月には県外の高校を訪問する機会もいただき、積極的に福島を発信している。

### 取組内容

6~7月を中心に、伝承館研修をはじめとして、福島復興、処理水、除染土再生事業などについて事前学習を行った。伝承館では原子力防災について学んだことが印象に残る。また8月に小名浜魚市場、海洋水産研究センター、アクアマリン、福島第一原発、飯館村などの見学研修を行い、処理水放出に関する学習を深めてきた。



### この事業のポイント

今年も、東京電力や行政の担当者、科学者から処理水・除染土について学び、懸念される風評問題についても水産業者から話を聞き、どうすれば風評払拭につながるかを考えてきた。まとめた内容は5月に予定されているフランス高校生との会議や、県内外の高校との交流の場などを通して積極的に発信するとともに、冊子として発刊する予定である。

## 事業名 福島県立安積高等学校SSH(スーパーサイエンスハイスクール) エssen交流事業

福島県立安積高等学校 教務部探究班

### 概要

安積高等学校では、SSH事業の一環である「産学官連携共創プロジェクト」の中で、地域課題解決を目指す様々な探究活動を行っている。特にここ数年は、県内全体の課題に加え、学校の所在地である郡山市と連携した取り組みを進めている。郡山市はドイツのエッセン市と連携協定を結んでいるが、本校は同市の学校であるGymnasium an der Wolfsschuleの学生と、SDGsをテーマとした共同プロジェクトを行っている。昨年度は新型コロナウイルス感染症の状況が好転せず、現地への渡航ができなかったものの、オンラインでの交流会を実施し、「震災からの復興」並びに「ふくしまの今」を国内外に発信した。今年度もこの取り組みを継続するとともに、特にSDGsのゴール7(エネルギー分野)について、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」とも関わらせながら探究を進める。昨年度実施できなかった現地への渡航については、1月に実施する計画で進め、渡航できた際には同校と交流会を開催する。

交流会の中では、東日本大震災からの復興に向けて進む福島の10年間で正確に発信することが必要になるが、現在の生徒は、震災当時小学校入学後の年齢であり、被災地や避難の状況についての理解が浅い。そこで、海外の人たちに復興への思いを伝えるため、県内の被災地を訪ねることや復興に向けて活動をしている方の話を聞くなど、今の福島を多角的に理解することからはじめ、特にエネルギー分野における福島の状況を発信できるようにする。そのことを通して、県内はもとより県外や世界に対して風評被害払拭の一助とする。

### 取組内容

- 事前研修として、浜通り地区の震災からの復興状況の視察
- ドイツ連邦共和国エッセン市Wolfsschuleを訪問し、授業参加や意見交換会、福島の現状の発信など3日間の交流
- ハイブリッド燃料である固体酸化物形燃料電池(SOFC)の研究を行っているGWI(Gas-und Wärme-Institut Essen e.V.)、ドイツの工業を支えた旧炭鉱Coal Mine Zollverein(世界遺産)の見学を通してのSDGs研修
- Wolfsschuleの生徒宅にホームステイ(異文化交流)



### この事業のポイント

この企画は郡山市との連携のもとに実施されたものです。ドイツ渡航は2年前から計画していましたが新型コロナウイルスの影響でオンラインでの交流が続いていました。今回が初めての渡航となりました。今後はWolfsschuleとの連携をより密なものにして、対面での交流の活性化と共同研究などを進めていきたいと思っております。

## 事業名 高校生による「ふくしまの未来を描き伝えるプログラム」

一般社団法人  
BridgeforFukushima

### 概要

福島の有志の高校生が、被災地訪問やワークショップなどとおして被災地とかかわり、その想いをアートの要素を取り入れたワークショップ(EGAKU)で描きながら、自分自身についての更なる深堀りをおこない、コミュニケーション能力等を培う機会をつくるためのサポートをします。

### 取組内容

高校生が自分の想いややりたいことと向きあうために(一社)ELABが展開する主体性・創造性に働きかけるプログラム「EGAKU」アートワークショップ(アートの鑑賞・創作・鑑賞・振り返り)を3回実施し、自己認知や他者承認を深めたり表現力、コミュニケーション力を伸ばすサポートをしています。そして、それを活かしながら福島の高校生の変化を発信します。



### この事業のポイント

震災を経験した福島の高校生たちが不確実な未来を主体的に切り拓く力やコミュニティを牽引するリーダーシップをもって今後活躍するために、アートの鑑賞・創作・鑑賞とおし、自己認知や他者承認を深め自分の中にあるモヤモヤや課題意識と向き合う「アートワークショップ」を体験し思いを言葉で表現します。

## 事業名 ふくしまの魅力を伝えよう!

福島市立福島第三小学校 第6学年

### 概要

- 東日本大震災・原子力災害に遭いながらも、伝統を守り、困難を乗り越え、前向きに生きる人々の姿や、地域や産業の復興と現状を自ら調べ、愛知県豊橋市立羽根井小学校の6年生に伝える。(下郷町大内宿、会津若松市、福島市を中心に)
- 郷土、福島を魅力を再発見し、そこに生きていくことに誇りをもつ。

### 取組内容

- 1学期は下郷町大内宿と会津若松市、2学期は福島市で、ふくしまの魅力についての調査活動を行う。その中で、震災が本県に与えた影響や、そこから復興に向けて熱意をもって取り組んだ人々の思いを理解する。
- 愛知県豊橋市立羽根井小学校の6年生とオンラインで交流し、お互いの地域の魅力について伝え合う。



### この事業のポイント

- 「ふくしまの魅力を伝えたい!」そんな熱い思いで、県内有数の観光地である大内宿や会津若松市、そして、ふるさと福島市で調査活動に取り組んできました。それによって、福島県は、三つの地方で魅力が異なることに改めて気付いていました。震災被害の影響が今でも残っていることを知り、震災が起きた年に生まれた子どもたちは、驚いていました。
- 調査活動を通して多様な人々と関わり、「人の温かさこそが、福島の魅力だ」「困難に負けずに復興に力を尽くしてきた人の存在が、福島の魅力」と実感していました。また、自分たちこそが、これからの福島県の担い手であることを自覚し始めています。
- オンラインを活用して他県の小学生と交流することにより、多面的・多角的な視点で福島県を捉え直すことができました。特に、2回目のプレゼンテーションソフトを活用した交流は、より一層互いの理解を深めていました。



## 事業名 知ろう！感じよう！創り出そう！未来の福島を考えるプロジェクト

棚倉町立高野小学校 第6学年

### 概要

6年生が総合的な学習の時間や学校行事において、東日本大震災当時と復興の様子について学習を進めた。また、その際、SDGsの観点を取り入れ、これからの未来を考える足がかりとした。5年生の時に富岡町の語り部の方の講話や富岡第一・第二小学校三春校との交流を通し、さらに震災について学びたいという意欲を高めてきた。本事業で特に学校行事では双葉郡を訪問し、震災の爪痕と復興の様子について学び、理解を深めた。その後、学びを整理し、学習発表会で広く地域の方々へ学びを発信した。

### 取組内容

春に1年間の学習の見通しを立て、企業の取組や学校内で自分たちにできることを探してSDGsに関わる学習を進めてきた。その後福島県の持続可能性を考えるため、東日本大震災に目を向けた。震災の被害状況や復興に向けての取組を知り、今後の活動へ繋ぐため、9月の修学旅行で双葉郡を訪れた。自分の目で現地の様子を見てきて、同じ県内でも自分たちの住む棚倉町とは違う部分が多くあることを実感した。被災地では、震災で奪われた「ふるさと」を取り戻そうと奮闘されている多くの方々の姿を見て、震災を伝えなくてはならないという思いや、「ふるさと」にこだわる理由を考えたいという思いを抱いた。11月の学習発表会では、修学旅行での学びや「ふるさと」について考えてきたことを、児童自身が発表原稿を考えたりスライド作成をしたりして、全校生や保護者、地域の方々に発表し、自分たちの思いを表現する活動を行った。



### この事業のポイント

児童が自分たちで学びの方向を決め、1年間を通して主体的に学びを創造してきました。「知りたい」「考えたい」「伝えたい」などの思いを9名全員がしっかりともち、たくさんの方にご協力をいただいたおかげで、実践を進めていくことができました。この活動を、自分たちの地域のこれからや、自分たちの未来を考える学習へも繋げられました。

## 事業名 MJCアンサンブルがつなぐ 福島の未来～

MJCアンサンブル

### 概要

震災を経験した私たちが、震災の記憶がない子どもたちと共に「未来の福島」を、地域の歴史や文化を学びながら紐解き、音楽交流を行い体験からの学びを被災地全体で共有する。

### 取組内容

- ①震災体験などをリーフレットにまとめ各地で配布
- ②北辺防衛を行った会津藩士や北方領土を視察し平和を考える
- ③地域の小学4年生と二宮金次郎を学ぶ
- ④北海道音楽交流として、豊頃町、札幌において3回実施
- ⑤クリスマスコンサートを行い地域の方々と情報を共有した。また、ウクライナ交流として津波で甚大な被害にあった沿岸部を巡るバスツアーを実施
- ⑥震災直後行方不明者捜索に尽力した自衛隊員の皆さんに感謝のメッセージ送付



### この事業のポイント

地域の歴史の学びをきっかけに北海道において先人たちの活躍を知ることができ、北方領土や平和について考えるきっかけとなった。加えて音楽活動を通じ出会うことができたウクライナ避難者の方々や地域の方々と情報共有を図ることができた。また、唱歌「二宮金次郎」を歌唱することにより、小学生にもわかりやすく報徳仕法を共に学ぶことができた。

## 事業名 「結」 沖縄県立八重山農林高等学校 × 福島県立小野高等学校

## 友好交流事業2022

小野町

### 概要

本事業は、小野町の名誉町民で東京農業大学名誉教授の小泉武夫先生が石垣市の「ゆばなうれ大使（経済大使）」に委嘱されている縁で、平成28年12月9日に沖縄県立八重山農林高等学校と福島県立小野高等学校との友好協定が結ばれたことを契機としている。それ以降、お互いの派遣団を受け入れるなどの直接的な交流やリモート交流などを通して、活発な地域交流を行ってきた。この交流事業の最大の目的は、環境や文化の異なる互いの地域の良いところを理解し合うとともに、復興に向かう「ふくしま」の実態について生徒が学び、発信することにある。また、総合学科である学校の特徴を活かして、小野町の特産品「黒にんにく」等に続く6次化商品を開発すること、参加した生徒が本事業で学んだ経験を元に、町の産業の担い手や地域のリーダーなど将来を担う人材として成長することを目的とする。

### 取組内容

- 「環境・文化の相互理解」、「生徒同士の親睦」、「「ふくしま」の発信」、それらの経験による「人材育成」を目的に事業を実施した。事前学習や3泊4日の交流研修を通して、活発な地域交流を行った。
- リモートでの事前学習
  - 郷土芸能の伝承についての学習
  - 地域特産物などの学習を通じた新商品開発。
  - 6次化商品の販売実習（石垣島まつり出展）による地域産業（農業等）の活性化の検討。



### この事業のポイント

前年度までは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、訪問による直接的な交流ができなかった。しかし、リモート交流を通して、互いの特産品を盛り込んだ「黒糖どら焼き」を完成させ、地域で販売会を実施できた。今年度は、事前にリモートで交流を行った後、直接訪問し、交流を図ることができた。異なる風土、文化を肌で感じることができ、視野を広げることができた。また、昨年度開発した商品を販売し、交流をPRできた事は良い体験となった。震災から10年以上経過し、福島の高校生の考えや思いを発信する素晴らしい機会となった。

## 事業名 演劇を通じた高校生による葛尾村の震災と復興の記憶発信事業

## 一般社団法人 双葉郡未来会議

一般社団法人 双葉郡未来会議

### 概要

葛尾村では2016年6月に一部地域を残し避難解除が行われた。しかし、2020年年度の帰村者は震災前の約1500人に対し300人ほどである。また、高齢者率は47パーセントとなっている。今後、震災前から震災後を通じて、村の震災と復興の記憶をつないでいく世代がいない。

本事業では、次世代が少なくなった被災地葛尾村をフィールドに、高校生が葛尾村の震災と復興の記憶を葛尾村住民へインタビューし、演劇という手法で発信を行っていく。高校生による震災と復興の記憶の保存と発信をもって被災地の活性化に寄与することを目的としている。

### 取組内容

- 【取組①葛尾村の震災と復興の記憶の保存活動】  
参加する高校生が震災と復興の記憶を知り、住民と関係構築するためにインタビューを行った。
- 【取組②葛尾村の震災と復興の記憶の発信活動】  
インタビュー時に得た葛尾村の震災と復興の記憶をもとに、葛尾村の住民と、演劇を一つ創作した。創作に関しては県外の演劇家からの指導をいただく。高校生が創作した演劇は実際に葛尾村で上演した。



### この事業のポイント

地域の震災と復興の記憶は、文字におこし発信するとその思いはなかなか伝わりづらい。そこで、演劇という手法を用いて、おもいよりリアリティをもってつたえられる。



## 事業名 高校生が撮り残す地域と震災の記憶

～白河・双葉・熊本をつなぐ～

一般社団法人 未来の準備室

### 概要

地域の飲食店や、防災・除染に関する取り組み、街を楽しむゲーム制作に取り組む白河市を拠点とする高校生グループ「裏庭編集部」が、東日本大震災について取材し、同じく震災の経験のある熊本県内の高校生や若者との交流を実施する。取材活動・交流を通じて、福島出身の高校生として、他地域・他世代との対話の手法や、分断ではなく協働を実現するための発信方法について実践的に学び、発信する。

### 取組内容

(12月18日)事前研修として南相馬市出身の元新聞記者鈴木さんから取材・執筆についての講義を受講。その後現地取材見学として、(一社)双葉郡地域観光研究協会の山根辰洋さん、大堀相馬焼いかりや窯の山田慎一さんにそれぞれ現地でインタビューを実施。双葉町では山根さん主催の「双葉町タウンストーリーウォーキングツアー」に参加、双葉駅周辺で震災当時や現在の復興の状況を見学。浪江町大堀地区では、震災直後の状態が残る当時の窯元の建物を見学した。

(12月26日～28日)熊本県訪問。熊本県立熊本北高校では、小峰城と熊本城のつながりや、双葉郡の被害・復興状況について調査・取材した内容を発表。両校の地域探究の魅力や課題についてのSWOT分析や意見交換を行った。熊本地震の震源地・益城町訪問では復興まちづくりセンターにじいるを拠点に被災や復興の状況についてお話を伺い、被災者支援や安否確認を担う民生委員の活動を体験。また震災語り部の方から震災遺構の保存状況について現地案内を受けた。熊本城では、白河小峰城の石垣修復技術が転用された石垣の様子を見学した。(1月10日)取材内容・撮影内容について記事執筆作業。執筆記事は「裏庭編集部」ウェブサイト・SNSにて発信予定。



### この事業のポイント

白河市内・双葉郡内・熊本県内のそれぞれで、実際に災害の記憶を継承するために活動する方への取材・交流を行うことができた。あくまで編集部の一員として自身が調査・体験したことを発信する立場で実践活動を行ったことにより、震災記憶の伝承に関わる困難さや、求められる能力について考えることもできた。熊本と白河、お城の被災と復興を経験した街という共通点を元に、同世代に向けて発信を行ったことで、地域探究への意欲を交歓し、継続的な連携の可能性も見出すことができた。

## 事業名 伝えよう「ふくしまの今」つなげよう「ふくしまの未来」

～竹田校の自分たちだからできること～

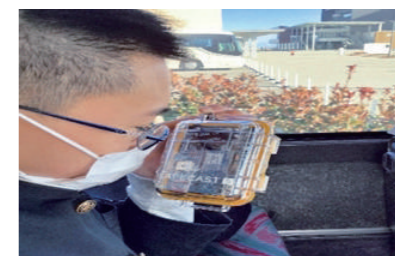
福島県立会津支援学校竹田校 チームSOGO

### 概要

- 1 ふくしまの「今を知る」活動  
被災地を訪問し震災遺構と復興の様子を見学したり、福島県立博物館の協力により大熊町の避難者から話を聞いたりすることを通して、震災当時の状況と「今」を直に知る。
- 2 復興への「思いを伝える」活動  
震災について調べ学んだこと、復興について考えたことや提案を、学校祭やメタバース(仮想空間)において様々な人に発表し、被災地と福島のこれからについて共に考えていきたい思いを生徒自身の言葉で伝える。

### 取組内容

- ①震災遺構の訪問(2回)と避難者の声の聞き取り
- ②被災地の放射線量の測定
- ③学校の学校祭での活動の発表、ホームページ等での発信
- ④地元ICT企業の協力によるメタバース(仮想空間)での活動の発表(2回)
- ⑤活動のまとめ(冊子)の作成と県内外の関係学校、機関への配付(広報)



### この事業のポイント

生徒たちは、病弱特別支援学校で学んでいます。病気や障がいによる生活上の制限や生きにくさを感じている生徒たちが、震災の状況を理解し、被災し苦しい生活をしてきた方々の思いに共感する中で、福島県の復興の在り方を模索するとともに、自分自身のこれからの生き方を考える活動になりました。メタバース(仮想空間)では、自分たち同様、病気や障がいのために被災地を訪問することが難しい県内外の児童生徒をアバターとして招待し、震災や復興についての発表や意見交換を行いました。活動を通じて、「ふくしまの今」を伝えるとともに「ふくしまの未来」への希望と共感の輪を広げることができました。

## 事業名 あいづっこから広がる交流事業

～会津から高遠へ、次世代を担う子どもたちが繋ぐ～

会津若松市  
子ども会育成会連絡協議会

### 概要

会津若松市子ども会のリーダーを目指す子ども会会員(原則小学6年生)が、リーダー講習会の一環として、長野県伊那市を訪問し、子ども会員同士の交流を図る。交流の際に、伊那市の子どもたちをはじめ多くの方へ、震災からの復興を図る今の福島・会津の現状について、子どもたちが故郷の魅力と感ずる点をまとめた郷土紹介とともに発表する。

(※)伊那市旧高遠町と本市は、江戸期初期の名君・保科正之公にまつわるゆかりから、親善交流都市を平成12年に締結している。本市と歴史的・文化的に深いつながりのある地で活動を行う。

### 取組内容

長野県伊那市の子どもたちと、交流会を行った。事前学習として、大熊町立学び舎ゆめの森校長の佐藤由弘先生をお招きし、震災当時の様子について講話をお聞きし、交流会では、講話で学んだことと会津の郷土について子どもたちが紹介した。また、両市の子どもたちで名刺交換会を行い、子どもたち同士の親睦を深める活動を行った。



### この事業のポイント

この事業を修了した子どもたちが、次年度以降子ども会のリーダーとして子ども会の事業で活躍します。県外研修で育った子どもが次の子どもを育てるというサイクルで、30年にもわたりこの事業は続いております。また、郷土を学習し、他の地域に広めるという点において、子どもたちの郷土愛を育むことができることもこの事業の魅力であると考えています。

## 事業名 『今の～ふるさと～福島を繋ぎ伝える』

子どもに音楽を贈る会

### 概要

- ①「福島しあわせ運べるように今の思いを発信プロジェクト①」
- ②「福島しあわせ運べるように今の思いを発信プロジェクト②」
- ③「福島の今の思いを発信活動」心の防災コーディネーターMAP取材・学習会  
発信用冊子「[あの日]を忘れない 震災学習コーディネーターマップ2」作成
- ④「福島の今の思いを発信活動」③を主軸に阪神・淡路大震災学習会

### 取組内容

- ①震災11年の思いを音声として収録しテーマに合わせて編集した団員の歌声を聴いてくださった方々に、団員ひとりひとりの意思を思いを表現し、震災後に出会った方々の思いをより共感的に聞き手に発信することが出来た。
- ②今まで交流してきた方々、新たな世界中の方々へインターネットを活用し子ども達が企画した発信活動を実施した。
- ③新型コロナウイルス感染症の影響で県外活動を自粛したが、交流を続けている県内の方々に「今の福島」を取材し発信用冊子をより良くまとめることが出来た。
- ④兵庫県神戸市・丸山ひばり小学校・「しあわせ運べるように」作詞・作曲者白井真さん及び「神戸親和女子大学」との交流・長田商店街での発信活動・防災未来センター・被災各地取材を通し団員の目線でまとめた震災MAP2、を活用し県内外の方々に震災学習のコーディネーターをし、震災に生きる今の方々の心に触れられる発信用冊子を使い、交流発信活動を行った。



### この事業のポイント

音楽を中核とした各活動を通じて、子どもたちの発する問題提起により、大震災の持つ生活への影響、子どもたちの人間関係への影響等を見る人に考えさせ、少しでも風化を防ぐ効果と共に子供の目線で見て聞いて、福島県の震災の根深さを知り、震災を自分のものと考えさせる契機になり自分の言葉で発信できるアイデアと心の成長が期待できる。震災MAPを形にし配布することにより、今の復興の現状や、被災当事者の吐き出しの形を設定することにより震災後活動を続けてきた軌跡を個々に確認する一助とし今後の活動の源となり、県内外の被災地の方々と継続的な交流が、次の災害時への防災減災の学びと備えの機会となり未来への活力となり地域とのつながりと絆になっている。



事業名 『被災地の青少年が〈福島〉の元気〉を世界へ発信する  
「映画製作」活動応援事業』

特定非営利活動法人 劇団スターキャスト

概要

- 東日本大震災によって、1709名の福島県民が犠牲となり、早10年が経ちました。街は復旧しましたが、震災前と震災後では、日本人として大切なものを失い、完全な〈心の復興〉は道半ばと感じてなりません。
- 弊団体は2017年発足時から、福島県教育庁、福島財団、いわき市、文化庁からの助成採択を連続14回受け、〈福島震災復興〉をテーマにした様々なオリジナルミュージカルや〈福島の元気〉(福島の子供達の今)〈演劇教育によるキャリアアップ〉を命題として地域活性化人材育成活動に尽力し、県内は元より世界中に発信を続けています。
- 昨年度から文化庁アーツフォーザフューチャー(AFF)が始まり、厳選な審査の結果、弊団体も採択され、映画製作の助成金を受けました。さらに、市内の人材や地元企業、いわき市および教育委員会のバックアップを得て、いわき市オールロケ2021映画「ザ・ショーゴマン」(show-go-man)〜炎の友情〜」を完成させました。5月14日(土)からは「まちボレイいわき」(福島県いわき市)でロングラン上映を開始するとともに、今夏から全国ロードショー展開を予定。
- 映画「ザ・ショーゴマン」は、震災津波で母親を亡くした主人公の高校生・勝吾が、「辛く困難な時こそ、おのれに勝て!」という母の名づけを心の支えに、被災地に蔓延る悪のゾンビ達を退治する痛快アドベンチャー冒険映画です。
- 今回製作を行う新作映画「悪魔王子」においても高校生を主人公とし、「風雲急を告げる世界情勢の中、〈次々と襲い来る福島の危機〉を魔法陣で呼出した悪魔王子と地元高校生とが連携して邪気払いする」という、老若男女が楽しめるSF特撮映画になっています。

取組内容

いわきの少年少女に、弊団体が持つ演劇教育を用いて、演技力は元より(自立心・表現力・突破能力・コミュニケーション力)を学んで貰い、市内様々な会場でその成果を発表。子供からご年配の方々に参加観劇頂き、〈幸福感〉〈達成感〉を体感して貰う市内活性化と人材育成事業。



この事業のポイント

- 人生において稀有な「映画制作」の現場に参加することで、俳優としての出演(発声力・アクション演技力・豊かな感情表現力)や技術スタッフとして協働(表現力・創作力・鑑賞力)を体感・体得。
- スキル向上(コミュニケーション力、気配り・目配り・心配りを含む人間力)(激動化する世界情勢を生き抜く力)や今後の進路・就職を考える一助になります。
- 福島への郷土愛の向上や、未来の福島さらには映像業界を牽引する人材を輩出出来ると思います。

事業名 相馬ながれやま踊りJuniorの会による福島の魅力発信事業

相馬ながれやま踊りJunior会

概要

福島っ子たちが、関西・北関東にて郷土の伝統芸能を披露。踊りを通じて郷土復興への思い、及び福島っ子の「負けない!」を発信する。

取組内容

- 8月 9日 京都市 知恩院三門にて演舞
- 12日 伊勢市 伊勢神宮外宮にて演舞
- 10月23日 日光東照宮・大内宿本陣前



この事業のポイント

コロナ禍にあっても、当初に計画した通りに実施することが出来ました。小学5・6年生等。多くの低年齢層が育った年となりました。

事業名 日中友好交流事業「あいでみ」

あいでみ協議会

概要

福島県内の復興課題や社会課題に関心のある高校生が、日本・福島に関心のある海外の高校生に福島の今を発信する事業です。地域の復興を考え、互いの地域が抱える課題を発見し、自分たちができる社会課題解決の活動に取り組みます。震災から10年が経過し、改めて震災について考える機会として福島県内の現状をリサーチし被災地でのフィールドワークを行い、震災当時の様子を知るとともに、現在の福島について考えます。また相互交流を行うことで震災からの学びを活かし情報を発信していただくとどまらず、社会問題解決への取り組みへとつなげる事業です。

取組内容

- 語り部、地震災害、水害、風評被害などテーマが重なる「熊本県」へフィールドワークを行いました。水俣、人吉、熊本などを視察し、福島との共通点や相違点などを考えることによって、福島への理解を深めました。



この事業のポイント

福島への理解をより深めるため、福島県内のフィールドワークのみならず、県外の先進事例を視察します。テーマの重なる熊本県のフィールドワークでは、語り部や風評被害脱却、熊本地震や水害からの復旧の軌跡をたどることで、福島の復興への理解を深めました。

事業名 ふくしま浜通り高校生会議

特定非営利活動法人 ハッピーロードネット

概要

- ① 福島第一原子力発電所内に保管されている処理水の海洋放出について、福島県内の高校生が現地調査を行ったうえで、地域の水産業者との意見交換を通じて、原発事故および福島の現状を理解する。
- ② 経済産業省や東京電力ホールディングス職員、意見交換や交流を行うことで、それぞれの価値観の共有と視野の拡大を実現し、地域課題の「自分事」化を図る。
- ③ SNSなどのメディアを用いて、情報発信を行う。本事業内で情報が完結するのではなく、全世界に向けて福島の直面する課題と復興の必要性を訴え、福島の現状に関する正しい認識などを一次情報に近い形で発信することで課題の再確認や風評被害の払拭につなげる。
- ④ 最終的に報告会を実施する。まとめ作業を通してアウトプットとリフレクションにより、高校生がより理解を深められるようにする。また、活動を通じての成果物として小冊子の作成や、首長・行政機関に向けた提言を作成する。

取組内容

- 11月12日、東京電力廃炉資料館・第一原発を見学、廃炉について特にALPS処理水に関して講義を受ける。13日、福島県漁連野崎会長から処理水海洋放出についての考えの講義を受ける。
- 12月17日、経済産業省職員から処理水海洋放出についての考えの講義を受ける。東京大学関谷直也准教授から風評被害についての講義を受ける。18日、福島民報社・福島民友新聞社社員からメディアの役割についての講義を受ける。
- 1月7〜8日、これまでの研修内容をまとめた。9日、報告会を開催し、政治家、政府関係者、行政、企業の方々に対して研修内容と課題解決方法を提案した。今後、政府に対する提言書をまとめる。



この事業のポイント

福島の喫緊の課題について考え、課題を解決するための方法を考えることができます。その中で、多くの専門家の方々との対話を通じて、課題を自分事化することができます。より深い探究活動に取り組むことができ、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高めることができます。



## 事業名 ふるさと創造・映像教育プロジェクト

ひろの映像教育実行委員会

### 概要

中学生による地域探究活動や映像制作を通して、地域の現状を知り、伝統と文化を見つめ直すことによって、ふるさとの良さを再発見し、広野町の未来と地域の復興に貢献できる子どもたちを育成する「ふるさと創造学」に取り組む。

その際、子どもたちがふるさとの「ひと・もの・こと」を直に感じ「その魅力を誰にどう伝えるか」「自分の思いをどう表現するか」等、試行錯誤する過程を大切にす。子どもが自らの主体性を発揮しながら、専門家とかかわり、自分の思いを形にできるようにしていく。子どもの思いと教師の願い、専門家の経験等が生かされながら、各学年の探究活動を創り上げることができるようにする。

### 取組内容

第1学年は、他県出身の生徒が多く在籍している。出身地と広野町の様子を比較しながら広野町の魅力を知る。(知る)

第2学年は、広野町に住んでいる人、広野町で働いている人たちが伝えたい思いをリサーチ。(伝える)

第3学年は、これまでの探究を生かし、広野町の課題解決のためのアイデアを考え、ふるさとの未来を追究。(創る)



### この事業のポイント

生徒たちが「ふるさと広野」のよさを再発見し、未来に向けて歩み出せるよう、自ら進んで地域の方々とかかわり、自ら考え、創造する活動を推進している。

大人にはない「中学生ならではの“感性”」を生かし、友だちと試行錯誤しつつ、外部講師や地域住民とかかわりながら、活動を創り上げる点が大きなポイント!

## 事業名 農業高校生による実践的六次化商品開発事業

農業高校経営マーケティングプログラム協議会

### 概要

福島県内3校の農業高校において、生徒が模擬会社を作り地元の農林水産物等を使った六次化商品の開発を行い、首都圏の消費者に向けて実践的な販売を行うことで高校生の人材育成も行いながら福島の農林水産物の美味しさ、安心安全をアピールする事業です。

### 取組内容

経営コンサルティング会社・NPO・地元農家や経営者等学校教員ではない専門知識をもつ講師により、東京のマーケットを意識した商品企画、事業計画・販売戦略の立案、試作、販売実践、決算・振り返りの一連の六次化商品開発のプロセスを1年かけて実践的に体験しながらアクティブラーニングで学び、実践的に六次化商品を開発販売します。



### この事業のポイント

地域の農林水産業者の取り組みを知る機会を提供することで、ふくしまの「今を知る」活動を行います。

実践的に六次化商品を開発販売することで、復興への「思いを伝える」活動を行います。

子どもたちの活動を支えてくださった皆様、ご協力ありがとうございました。